

楽園の喪失 一本の木

【聖書】創世記3章1-24節 ◆蛇の誘惑

3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」3:2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3:3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」3:4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。3:5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」3:6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。3:7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。3:8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、3:9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」3:10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」3:11 神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」3:12 アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」3:13 主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」3:14 主なる神は、蛇に向かって言われた。

「このようなことをしたお前は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で、呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。3:15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」3:16 神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する。」3:17 神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。3:18 お前に対して、土は茨とあざみを生えいさせ、野の草を食べようとするお前に。3:19 お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に戻る。」

3:20 アダムは女をエバ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。3:21 主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。3:22 主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」3:23 主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。3:24 こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。

[序] 人の言葉に応える草花

私の説教は、9月からクリスマス前にかけて旧約聖書を取り上げることにして、前回は聖書全巻の書き出し、天地創造について学びました。

私たちの次男は、ケーキ作りの修行からパン作りに移り、7月から、神戸の店で働き始めましたが、先日こんな便りを寄こしました。

“仕事の一つにテラス席に小さな花を活けるといふのがありますが、これが意外と難しい。まず気持ちを落ち着けて花をよく見なければいけない。花とご相談です。そうじゃないと、なかなかバランスよく仕上がらない。草花は話しかけながら育てるといふ話は、案外事実なのかもしれないと感じます。”

そうですね。ベランダの鉢植えの植物でも、言葉をかけながら水をやり、世話をすると、生き生きとしてくるという話を、私もよく聞かされました。人間や動物だけでなく、植物も私たちの言葉かけに応える命を持っているのですね。全ての物に精霊(Spirit)が宿っている——そこから精霊信仰(Animism)が生まれました。格別に優れたものに宿っている Spirit は特別な力があるはずだから、怒らずと崇りも大きいし、良い関係を結べば加護があるとして、優れた人や生き物や木や石などを神さまとして拝みます。

これに対して聖書は、神さまは天地万物を創造された唯一のお方、ほかの一切は、全能なる神さまによって創造された被造物に過ぎないという信仰を私たちに教えています。ですから神さまによって造られたものをよく観察すれば製作者である神さまがわかってくるのは当然です。聖書はこう語っています。

「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す」(詩編19:1)。

「目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は、被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」(ロマ1:20)。

小さな花にも、人間のやさしい心に応答する命が宿っています。なぜならば、愛の神さまが、この草花を造り、命を与えておられるからです。被造物に宿る神さまの創造の業の素晴らしさに驚き、被造物を神としないでそれを造ったお方への信仰を深める——ここに日本の文化に見られる精霊信仰とは異なる聖書の信仰があるのです。

さて今日は創世記の2～3章を学びましょう。

[1]エデンの園のすばらしさ

神さまが創造されたこの天地万物は、全て極めて良いもの、very good でした。それを私たち人間の立場から言うと、どういうことになるのでしょうか。それが2章のエデンの園の記述です。そこには「見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木」が生えていました。おいしい食物が豊かにあった、ということです。またそこは金や宝石を豊かに産出する地でもありました。そして人間には、この楽園を耕し守るという仕事を与えられました。またルールと秩序があったのです。

多くの人の考える幸福とは、お金や財産がたっぷりあって、おいしいものをたらふく食べて、遊んで暮らせることでしょう。よく「食うために働く」と言いますね。お金ができて暮らしに困らなくなったら働く必要はないと考えるのです。でもそれは間違いです。人間は、責任のある仕事なくなると、生きる張り合いもなくなってしまうのです。また、みんなが仲良く暮らしてゆくには、ルールと秩序が必要です。ですから神さまは、おいしい食べ物や金や宝石がたくさんあっても、秩序ある社会を管理する仕事をお与えになりました。これが楽園なのです。

最後に神さまはとても大切なお配慮をしてくださいました。それは助け合って生きてゆくうえで欠かせないパートナーです。まず動物や鳥が造られました。前回は申し上げましたように、動物も鳥も私たち人間に合う助けるものとしてつくられたのです。互いに食べ合うなどという現象はなかったのです。人間も他の生き物も食べ物も青草と木の実でした。

神さまは続いて、男に対する女を造って下さいました。同じ人間でありながら男と女という全く質の異なる人間が、「あなた」と「私」という人格関係でもって補い合い助け合うパートナーシップ。その究極は夫婦の助け合いだという信仰です。このように神さまがお造りになった世界は私たちにとっ

ても very good のエデンの園だったのです。

ところが今日の私たちの世界はどうでしょうか。人間同士、動物同士、また人間と動物の間に争いがあります。殺し合ったり、食べ合ったりさえしています。決して very good の状態ではなくなっています。

どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。その根本原因は、人間が創造者である神様が決めたルールを破ってしまったからだ、というのが聖書の信仰です。

[2] 失樂園の悲劇

では3章に入ります。Very good の世界、エデンの園の中央に神さまは、命の木と善悪の知識の木を生えさせたくて人にこうお命じになりました。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」。しかし女は蛇に誘惑されて、その木の実を取って食べてしまいました。それから男にも渡したので、彼も食べてしまいました。すると二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉を綴り合せて腰を隠しました。

彼らは神さまの足音を聞いて恐ろしくなり、その御顔を避けて木の陰に隠れました。「どこにいるのか」。「あなたの足音が園の中から聞こえたので、恐ろしくなり隠れております。私は裸ですから」。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか」。アダムは答えました。「あなたが私と共にいるようにして下さった女が、木から取って与えたので食べました」。女は「蛇が騙したので食べてしまいました」と答えます。こうして神さまの裁きが蛇と女と男に下りました。そしてアダムとエバはエデンの園を追放されてしまい、再び戻るができなくなったのでした。

さて、神さまはどうして食べたらず死んでしまうような危ない木をわざわざ園の中央に生えさせたのでしょうか。しかも欲しいと思って見れば見るほど、いかにもおいしそうで、心をそそのかされるような実がなっているのです。そこで人間がエデンの園を失うという悲劇は、次の三つの要因が重なって起きたと言えるでしょう。

1. 人間は、つい欲望に負けてしまう弱さを持っていたこと。
2. 狡猾に人間をそそのかす蛇がいたこと。
3. そのような人間や蛇がいるのに、神さまはわざわざ園の中央に食べてはいけない木を置かれたこと。

としますと神さまの創造の業も very good に見えていて、実は悲劇の種を内に秘めていた、だから本当の意味での very good ではなかったことになる、というのでしょうか。皆さんはどうお考えになりますか。

[3] 不断の努力を欠いた誤り

敗戦後、日本は新しい憲法を持ちました。占領軍に押し付けられたものだから、自主的な憲法を制定しなおすべきだという根深い主張が国民の一部にあります。しかしこの憲法は読めば読むほど素晴らしい憲法です。戦争を放棄した平和主義の理想は言うに及ばず、国民はすべて個人として尊重され、その生命、自由、幸福の追求の権利は、構成上最大の尊重を必要とする、と謳われています。ですから自民党の中に1967年頃から靖国神社国家護持法案を国会に提出しようという動きがはっきりしてきた時にも、憲法が思想・信教の自由を保障しているのだから、国民の思想統制に大きな役割を果たした国家神道の復活など起こり得ないと私は思いました。ところが友人から憲法

第 12 条を示され、自分の間違いに気付かされました。

「第 12 条 この憲法が国民に保証する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない」。

国民一人ひとりの基本的人権と自由とは、憲法があるからそれで守られるというのではなくて、憲法による保証と国民の不断の努力の両方が相俟って国民生活の内に定着し、確立してゆくのだというのです。そこでキリスト教会は、この 33 年間、政府・自治体と神社神道儀礼との結びつきを許さない裁判の判決を一つひとつ獲得し、積み重ねて、信教の自由を確立する努力を続けてきています。

わたしはエデンの園についても同じことが言えると思うのです。神様が very good な環境・条件を設定下さったのだからもうだいじょうぶ、エデンの園はいつまでも very good なのだとつい思ってしまう。でも、それは間違いです。機械ならば、スイッチを入れれば、彼は設計通り自動的に動いて仕事をします。でも人間はロボットではありません。神さまにかたどって造られた者として、自主性を備えて人格を持っています。very good な生活を継続させようという自覚を持ち、不断の努力をして暮らすことによって保たれていくのです。

ですから神さまはこのエデンの園を「守るように」(2:15)と人間にお命じになったのでした。人間は自主的にエデンの園を守り very good な状態を続けてゆく責任を果たさなければならなかったのです。しかしアダムとエバには、その責任の自覚が欠けていて、神さまの期待を裏切ってしまいました。樂園喪失の責任は全く人間の側にあったといわざるを得ません。

[4] 神が禁止された理由

神さまは、どうして善悪の知識の木の実だけは禁じられたのでしょうか。善悪の判断は道徳の土台です。良いことは行い悪いことはしないというのが道徳です。ですから子どもを育てるにあたっては、善悪の判断を正しくできるようにと親も教師も心がけます。でも神さまは、何が善で何が悪かの決定権は人間の手に渡してはならないとお考えになりました。

そうです。最近日本では、三菱自動車が車の欠陥から生じた事故を社内でひそかに処理して、政府にもうその報告をし続けてきたことが暴露されて、社長の首が飛んでしまいました。人の命や法律よりも会社の利益や対面や社内の和が大切で、上役や前任者の間違った決定に異を唱えて事を荒立てることはしてはならないという、その会社の内だけしか通用しない善悪判断が、その会社を支配しています。そしてこれは三菱自動車に限らず、いたるところで行われている悪ではないでしょうか。

こんなことがあちこちで行われている社会がエデンの園と言えるでしょうか。人間が自分の都合の良いように善悪を勝手に決めると、このような悪が生まれます。良いこと、悪いことはいつ・どこでも同じでなければなりません。そのために、善悪を決める権威は神さまがお持ちになり、私たちは一つ一つ神さまに聞いて、それに従っていく時にのみ、世界は一つの善悪の基準で貫かれ、秩序が正しく保たれていくのではないのでしょうか。

「園のすべての木からとって食べなさい。ただし善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」(2:17)。

神さまのこのお言葉は、ただ一本を禁じられただけのもので、死ぬことのない命の木の実すら食べてよいという豊かな祝福の言葉でした。しかも善悪の知識の木を禁じられた理由も、それによって善悪の基準が人によって違ってきて混乱が生じることがないようにして、エデンの園の very good をいつまでも保つためにほかなりませんでした。ですから「決して食べてはならない」「必ず死んでしまう」という非情に強い言葉で神さまは禁止されたのでした。アダムのエバも事柄の重大性をはっきり自覚して、そのお言葉に従うべきでした。そしてエデンの園を守る責任を果たすべきでした。しかし蛇の問いかけに対するエバの答えには、そのような自覚がみられません。

もし自覚していたら、「園の中央に生えている木の実だけは食べてはいけない」などと言わずに「善悪の知識の木からだけは」とはっきり言えたはず。「死んではいけないから」などとあいまいな言葉ではなく、「必ず死んでしまう」とはっきり言うべきでした。

このあいまいさが、「食べても決して死ぬことはない」という勝手な推測を独り歩きさせたのです。聖書を自分の都合の良いように読み取っては、決して神さまの祝福をいただけません。私たちは神さまのお言葉を注意深く正確に聞き取って、それを心に留め、自分の生活の中に誠実に実行していかなければなりません。

[結] 楽園を取り戻すために

神さまは決して食べてはいけない善悪の知識の木を、わざわざエデンの園の中央にお据えになりました。人が善悪を勝手に決めないで一つひとつ神さまに問いながらエデンの園を守る責任を果たしていく時に神さまが創造された世界は極めて良いものとして保たれていくからです。禁じられた園の中央の一本の木は、エデンの園の主人が、まさに神さまであることを示す表札だったのでした。エバが聞いた誘惑の言葉はこうでした。

「それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」(3:5)。

神のようになる——人は神のようになることによって、もう神さまを必要としなくなります。人が良いこと、悪いことをそれぞれ自分の都合の良いように決め、エデンの園の主人であるかのように行動し始めたら、衝突・争いが生じるのは当然です。調和と平和はたちどころに崩れてしまいます。

人間が神さまを「主」とあがめて、一つの御旨をみんなで真剣に聞きながら生きていく時のみ、楽園は楽園であり続けるのです。ところが人は神さまなしで生きようとし始めたことによって楽園を破壊してしまいました。楽園を失うことになった責任は、神のようになろうとした人間にあります。

人はもう一度神さまと共に生きるようになるために悔い改めなければなりません。神様がとても良いものとして造って下さった姿を失っている状態——本来の姿を失っていることを「罪」というのです。罪とは、神なしで生きている者の状態です。私たちは悔い改めて、この罪からの救いを、神さまに求めなければなりません。

イエス・キリストは十字架にかかって死に、ご自分の神の子の命を私たちに与えて下さる救い主です。ですからイエス・キリストを救い主と信じるならば、私たちも神の子となり、神の言葉を聞きつつ生きる者となれます。そして、神さまが下さる調和と平和を心に取り戻します。そして、まだ暗闇が混沌としているこの世界が極めて良かった神さまの創造の秩序を取り戻すために、働くことができます。イエス・キリストをご自分の救い主としてお信じになりますか。神様と共に生きる生活を取り戻しになりますか。楽園を取り戻しになりますか。